

明晰な日本語の歌を求めて

中嶋恒雄作品の夕べ

中嶋恒雄・啓子

日本歌曲の世界

2006年10月20日(金) 王子ホール

【後援】(社)日本歌曲振興会／(社)日本作曲家協議会／(財)音楽文化創造／(財)音楽教育振興財団



ごあいさつ

中嶋恒雄・中嶋啓子

本日は、お忙しい中を私たちの音楽会にお出で下さり、本当に有り難うございました。私たちは、10年ほど以前に故黒髪芳光氏と中村綾子氏の導きによって今日の社団法人日本歌曲振興会に入会して以来、先輩達の仕事に学びながら日本歌曲のあり方について、作曲作法と歌唱法の両面から2人で共同研究をすすめてまいりました。近年ようやく、私たちなりの方法が見えて参りましたので、多くの方々のご高評を賜りたく、本日の演奏会の運びとなった次第です。

日本歌曲の課題は、畢竟、西洋の作曲様式と演奏様式の上に、日本語をどのように適合させるかにつきますでしょう。元来、イタリア語やドイツ語などの発音に適して作られた発声法が、母音や子音のあり方のまったく異なる日本語を発音すれば、違和感や不明瞭さを生じるのは当然のことでしょう。そこでこの課題に気付いた歌手たちは、本日共演して頂いた竹澤嘉明氏のように、邦楽の歌唱法などを取り入れることによって課題の解決を計ろうと致します。もちろん私たちもこのことに気付きました。しかしそのありようは、基礎となる発音体、共鳴体のあり方が人様々である以上、さまざまな方法があると思います。しかし評価はただ一つ、会場の隅々にまで日本語が日本語として聞き取ることが出来るか否かの観点からなされるはずです。このためには当然のことながら、旋律も、日本語が日本語として聞こえるように作曲されていなければなりません。私たちがこの課題を全て解決したとはもちろん考えてはいませんが、この方向に努力した痕跡を聴き取って頂けるならば、これに過ぐる喜びはありません。

なおこのプログラムに、高校時代の級友大須敏生さんから一文を寄せて頂きました。有り難うございました。大須さんは高校時代級友一の秀才で、旧大蔵省において国際金融局、理財局の長或いは駐米公使、日銀理事等をつとめられた経歴をお持ちですが、私たちには、今日でも毎晩音楽会に通われる、辛口の音楽通として知られております。

2006年10月

中嶋恒雄君のこと

大須敏生

中嶋恒雄君は、1952年に日比谷高校に入学した同級生。小柄で色白、鼻筋の通った、いかにも都会っ子らしい美少年でした。この年は、9月にサンフランシスコ平和条約が締結された『区切りの年』で、入学当時は未だ占領下。校門前の永田町一帯には駐留軍将校宿舍が立ち並び、有刺鉄線を張り巡らした高い金網と米軍お仕着せの制服制帽に身を固めた同胞の老歩哨が、勝者と敗者の世界を分断していました。

そういう惨めな『心象風景』に彩られてスタートした高校生活でしたが、当時の日比谷高校は、今想い起こしてもワクワクするような活気に満ち溢れていました。中でも、昔の『東京府立一中』の伝統を受け継いだ『文化芸術』を尊ぶ風潮は、仲間同士競い合っや背伸びする傾向はあったにせよ、多くの生徒たちのその後の人間形成に役立つ、大きな遺産になったように思います。

中嶋君の得意な領域はもちろん音楽。シューマンのピアノコンチェルトの演奏でコルトーばかりが持て囃されルビンシュタインが貶されるのがいかに不当であるかを、顔を真っ赤にして論じていたのを今でもよく憶えています。彼のメッセージは、『自分の耳で聴け』ということ。それは当時の音楽好き仲間が実践して来たことでした。

しかし、その中嶋君が本気になって作曲家の道を選び、東京芸大に進んだことには、少なからず驚かされました。素人の耳には、いわゆる『前衛音楽』の牙城だった当時の音楽アカデミズムの作曲界は、先ず前衛であらねばならないという意識が先に立ち、音楽というより『音苦』の制作に熱を上げているように思えたからです。そういう不思議な世界に棲む『作曲家』という人種が自分達の仲間から巣立って行ったことには、（失礼ながら）『彼、大丈夫かな』との思いを禁じ得ませんでした。

その後、社会人として人並みに多忙な生活を送ったため長い空白期があり、中嶋君の音楽をゆっくり聴かせてもらうようになったのは、1990年代になってからです。一聴して感じたことは、フランス印象派風の作曲技法を自在に駆使していながら、日本の伝統音楽の『間』のとり方や響きを西洋音楽の作法に従って表現するという独自の境地を拓き、それを揺るぎないものとしておられるということです。芸大入学から40有余年、指揮者として或いは教職者としての活動を含む長い研鑽を経て、『作曲家中嶋恒雄』が見事に花開いたとの印象を受けました。特に近年は、啓子夫人との共同研究を活かし、ベルカントの唱法を用いながら日本語が素直に耳から入ってくる歌曲の作曲を数多く手掛けられ、次々に意欲作を世に問うておられます。

お互い古稀の年を迎えたこの秋、親しい友人が志を遂げた成果を頒ち与えてくれる日を迎えるのは、実に嬉しいことです。

2006年8月29日

プログラム

- | | | | |
|--------------|---|------------------|--|
| 1 | 三好達治の詩による二つの歌曲
一點鐘二點鐘
乳母車 | 詩：三好達治 | sop. 中嶋啓子
p f. 酒匂 淳 |
| <hr/> | | | |
| 2 | 堀内幸枝の詩による四つの歌曲
春の一日
また次の恋人に
石垣
九月の日差し | 詩：堀内幸枝 | sop. 中嶋啓子
p f. 酒匂 淳 |
| <hr/> | | | |
| 3 | 新・波の会歌曲集より
終戦の夜も — 広島 —
鬼のつぶやき | 詩：橋爪 文
詩：狩野敏也 | bar. 竹澤嘉明
p f. 酒匂 淳 |
| <hr/> | | | |
| ・・・休憩 15分・・・ | | | |
| 4 | 万葉による挽歌 | 詩：柿本人麿 | sop. 中嶋啓子
v n. 千葉純子
箏 横山佳世子 |
| <hr/> | | | |
| 5 | レクイエムー 学徒出陣戦没同期生の霊に捧げる | 詩：江見俊太郎 | sop. 中嶋啓子
bar. 竹澤嘉明
c l. 海鋒正毅
p f. 酒匂 淳 |
| <hr/> | | | |
| 6 | 海の太鼓 — そして知る人は誰も居ない — (ヘルダリーン) | 詩：小磯 仁 | sop. 中嶋啓子
p f. 酒匂 淳 |
-

曲目解説

■ 三好達治の詩による二つの歌曲

この作品は 1997 年に中嶋啓子によって初演されて以来、日本作曲家協議会アンデパンダンやプラハ・スメタナ博物館演奏会など、多くの場所で再演された。上野晃氏はこの曲について、『言葉のリアリティをピアノの彫塑的な描出とともに投影していく』と批評している。

■ 堀内幸枝の詩による四つの歌曲

2000 年から 1 曲ずつ、詩人堀内さんの私宅での集まり『桃の花会』で発表してきたが、2005 年にすみだトリフォニーでの第 9 回 JFC アンデパンダンで、全 4 曲をまとめて初演した。詩は堀内さんの郷里山梨が背景となって、うたわれている。

■ 新・波の会歌曲集より 『終戦の夜も — 広島』『鬼のつぶやき』

広島に関連する作品を中嶋は 2 曲作曲したが、この『終戦の夜も — 広島』は、1995 年、(社)日本歌曲振興会の前身である「新・波の会」に入会した第 1 作である。楽譜は、新・波の会歌曲集 10 (全音楽譜出版社 1997) に収録されている。『鬼のつぶやき』は敬愛する詩人狩野敏也氏の詩によって書いた第 2 作である。狩野氏の作品は、内容が重いのに諧謔に装われているために、非常に曲にし難い。しかしこの作品は、1998 年新・波の会定期で初演した藤崎啓之氏の個性溢れる好演とともに、満場を沸かせる作品となった。楽譜は、新・波の会歌曲集 13 に収録されている。

■ 万葉による挽歌

学生時代に万葉を素材とする作品を 2 曲作曲したが、この曲は、1986 年の第 3 回アルビレオ音楽展に発表したソプラノ、ヴィオラ、箏のための作品を何度か改訂して、今日の形となったものである。前半に長い vn. と箏の序奏があり、後半にようやくソプラノが入る 2 部構成になっている。初演は sp. 田村美知子、va. 藤原義章、箏・雨宮洋子の諸氏が担当した。

■ レクイエムー 学徒出陣戦没同期生の霊に捧げる

この作品は、海軍一生会の依頼によって 1993 年に作曲初演した。初演は二期会下野昇氏が担当したが、今回はバリトンとソプラノのために 2006 年に改訂初演した版を使用している。詩は、第 2 次大戦において海軍特攻隊員として戦死した学徒出陣生山田又一の遺書と、学徒出陣 50 周年を記念した集まりにおいて、山田を偲んで寄せた同期生で俳優として活躍した江見俊太郎の詩を組み合わせで作曲した。私たちは、この詩を涙なくして読むことはできないが、それであるからこそ、今日の世界の構成員である私たち一人一人が、未来の平和と戦争の意味について十分に考え続けなければならないのである。

■ 海の太鼓

この曲は 1996 年にアルビレオ音楽展で初演以来、プラハやウィーンでの演奏会も含めて、多くの機会に再演された。詩は作曲者の勤務した山梨大学の親しき同僚であり、ヘルダリーンの研究者として国際的に知られている小磯仁氏のものによっている。上野晃氏は、この曲について『重い運びで、ドイツの詩歌のようなゲミュートをも、ピアノと歌で共生させる』と批評した。また曲の詩はヘルダリーンに関連してうたわれているために、ドイツ・ヴュルテンベルク州立図書館が 2000 年に刊行した『Musikalien und Tontrager zu Holderlin 1806-1999』の中に、ブラームスやシューマンの曲と並んで登録されている。

■ 三好達治の詩による二つの歌曲

一點鐘二點鐘

静かだった
静かな夜だった
時折りにはかに風が吹いた
その風は そのまま遠くへ吹き過ぎた
一二瞬の後 いっそう静かになった
さうして夜が更けた
そんな小さな旋風も
その後谿間を走らない・・・
一時が鳴った
二時が鳴った
一世紀の半ばを生きた 顔の黄ばんだ老人の
あの古い柱時計
柱時計の夜半の歌

山の根の冬の旅籠の
噫あの一點鐘 二點鐘
その歌声が
私の耳に蘇生る
その物憂げな歌声が
私を呼ぶ 私を招く
庭の日影に筵を敷いて
妻は子供と遊んでゐる
風車のまはる風車小屋
—— 玩具の粉屋の窓口から
砂の麵麴粉がこぼれ出る
麵麴粉の砂の一匙を
粉屋の屋根に落としこむ
くるくるまはれ風車
くるくるまはれ風車 ——
卓上の百合の花心は
しっとり汗にぬれている
私はそれをのぞきこむ
そうして私は 私の耳のそら耳に
過ぎ去った遠い季節の
静かな夜を聴いてゐる
聴いてゐる
噫あの一點鐘
二點鐘

乳母車

母よ～～～
淡くかなしきもののふるなり
紫陽花いろのもののふるなり
はてしなき並樹のかげを
そうそうと風のふくなり

時はたそがれ
母よ 私の乳母車を押せ

泣きぬれる夕陽にむかって
りんりと私の乳母車を押せ

赤い総あるびろうどの帽子を
つめたき額にかむらせよ
旅いそぐ鳥の列にも
季節は空を渡るなり

淡く哀しきもののふる
紫陽花いろのもののふる道
母よ 私は知っている
この道は遠く遠くはてしない道

■ 堀内幸枝の詩による四つの歌曲

春の一日

桜の花は散って
小さな村には
春の雲が低く垂れてゐた
時どき華やかに盛り上ってくる
子供の声は
雲の中に吸ひ込まれて
燻った煙のやうに
又立ちこめる春の雲
風もなく
賑やかな声が浮いたり沈んだり
とろりとろりと
楽しい春の一日は
村なかの子供の声から暮れて行く

また次の恋人に

『愛してる』なんて
言わなくていいの
公園のテニスコートの柵にもたれて
言うこともなく
怠惰な雲のように寄合っていよう
わたしの中には ただ
霧のようなもの憂さが
詰まっているだけだもの

あの ヨットの形になったり
王子様がお姫様の手をひくような雲を見て
人間の及ばないロマンスでも
考えていよう

わたしのオッパイにさわったら
後の赤いカンナのせいにしておいて
『愛してる』なんて言わなくていいの
わたしには ただ
雨のようなもの憂さが

立ちこめているだけだもの

わたしを抱いているあいだ
汽車の煙をみながら
他人の悲劇や喜劇でも考えていよう

ホックをはずし
あの 一寸きわどい時は
信号の付いたり消えたりしている間だけ
猫のように寄り合って
あなたが わたしをどのくらい好きかなんて
印象的な言葉に
まごつかない先に
ありあわせのような二人で立上がろう

夕暮れ
やるせなく咲いている紫陽花のそばは
あなたを外側にして歩こう

石垣

いちじつ日の照る
石垣の下

ここでは菜の花が
ひとかたまり咲いてゐる

その下をまた
田圃道は白く長く続いている

まひるは静かで
誰も歩いてゐない

たった一つ私の影を歩かせてみる

九月の日差し

毎年 毎年
九月十日から十五日までの
赤い赤いなんと赤い
いろ紙より赤い夕焼けより赤い
夏より秋の交差点で
夏の光に疲れた心にさす
秋風にくるまれて
私の前にひんやり立つ日差し

安らぎが欲しいのになぜか不思議
私は何時も独り居がすきだが
この日差しを見ると
半分になりたい

私がいまいる場所
秋風のしむ草の上
私の足もとに

手鞠のように落ちてくる日差し
肩に手をおく 次に 明瞭に
人間に分析できる言葉でささやく

『かつてお前はこんな秋草の上で
彼と別れの言葉を交したではないか
自分をいつわったあの日を
後悔しないか』

九月十日から十五日までの
熱もなくあたたかさもなくて
いろ紙より赤い夕焼けより赤い
夏と秋の交差点で
色素だけの鞭で迫る
九月の日差しをどうしよう

■ 終戦の夜も ～ 広島 ～

詩 橋爪 文

おそろしいような青い空でした
おそろしいような雲の峰でした
この世の地図から消された広島を
真夏の太陽が
じりじりと焦していました

私は裸足でひとり焦土を歩いていました
今夜の糧の芋蔓を引きに行くのです
街のはずれの演習場の隅に
軍隊の芋畑が焼け残っていました

『ああ 暑い』
まぶしい空を見上げたときです
生き物のように襲いかかる雲の峰が
銀粉をこぼしはじめました
キラキラと光りながら舞い降りた小さな紙片
終戦のしらせ
死の街の空をきらめかす終戦告知のビラ
終戦

その夜
焼跡の木片を燃やして
明りと暖をとりながら
軀を寄せ合って
芋蔓の皮を剥く数人の生存者たち
明日はこの中の誰かが
欠けているかも知れない
重傷者たちは
いつものように屈託なく談笑しました
死と向き合いながら
いま生を共有する者たちだけが知った
あかるさでした

ビラの話は出ませんでした

■ 鬼のつぶやき

詩 狩野敏也

鬼のおいらは昔から 人べらしの名人で
人間を こう つまんでは ひとひねり
また つまんでは ふたひねりしてパクリ
これがいちばん うまいにはうまいけど
ヤッパリ サッパリ とかく らちあかない
リストラ リストリ リストレ トレトレ
リストロウ リストルナ

それというのも この地球 もうこれ以上
人間どもに増えられては かなわんと
思案のあげく ご承知ずみのこと
そこで 伝家の宝刀 ひらりと抜いて
ビョーキにセンソウ ピンボウはやらせた
リストラ リストリ リストレ トレトレ
リストロウ リストルナ

十四世紀からこれまでに ペスト コレラに
天然痘 痛にエイズとはやらせた
ところが ちかごろ 人間じぶんから
あっちでも戦争 こっちでも戦争
これじゃ鬼の出番もなくなりそう
リストラ リストリ リストレ トレトレ
リストロウ リストルナ

大きな声では言えないけれど これはみな
さる御方の思し召し おいらはただの
三下やっこ その人の いやそのかたの
名は 口が裂けても申せない なになに
鬼の口は 昔から裂けているだと チェッ
リストラ リストリ リストレ トレトレ
リストロウ リストルナ

■ 万葉による挽歌 ～ 柿本朝臣人麿が、妻の死んだ後、
泣き悲しんで作った歌（巻第二）～

うつせみと 思ひし時に
たづさはり わがふたり見し
走出の 堤に立てる
楓の木の こちごちの枝の
春の葉の 茂きがごとく
思へりし 妹にはあれど
世の中を 背きし得ねば
陽炎の 燃ゆる荒野に
白たえの 天ひれ隠り
鳥じもの 朝立ちいまして
入日なす 隠りにしかば

吾妹子と ふたりわが寝し
枕づく 妻屋の内に
昼はも うらさび暮し
夜はも 息づき明かし

嘆けども せむすべ知らに
恋ふれども 逢ふを無み

去年見てし 秋の月夜は
照らせれど 相見し妹は
いや年離る

■ レクイエム ～ 学徒出陣戦没同期生の霊に捧げる ～

故山田又一君遺稿

名をも身をも さらに惜しまずもののふは
守り果たさむ 大和島根を

姉さん 俺はまだ生きている
あと六時間半の命だけど
何故か生きているのが嬉しい
俺は 死ということを考えない
特攻隊員として二度目の出撃だ
今度こそ必ず成功する

姉さんの笑顔が浮かぶ
俺は ただ姉さんの幸福を祈る
俺はまだ 生きている
生きているということは
なんとなく嬉しい

俺は 基地に咲く名も知れない花を
胸にさしてニッコリ笑って往く
その花の香りは お母ちゃんの匂いもする
姉さんの匂いもする 妹たちの匂いもする
兄さの姉さんみち子の匂いもする
もちろん なるちゃんの清い匂いもする
俺は幸福だ 無限の幸福に感泣して・・・
姉さん 幸福は必ず南の空の彼方から来る
俺の肉体は 沖縄の海に砕け散るが
心はつねに 姉さんの何処かにある
姉さん 俺はまだ生きている
ニッコリ笑っているよ
俺を信じ 俺を愛してくれた姉さん
弟の心は清くて美しいと思ってくれ
では もう時間がない
最後に 最後に 姉さん
さようなら

『国魂の神に捧げる詩』

詩 同期生 黒川輝郎（築城・江見俊太郎）

我ら いま
 ペンを捨て 銃とり往きて散華せし
 君らがみ魂を弔いて
 靖国の庭に集うなり
 君逝きしより半世紀
 我らが頭も白みたり
 想えば君は戦の終わりのも待たず
 尊き命を捧げたり
 名もなき花を胸にさし
 南の島に散華せり
 われらみな 持つべき翼を失いて
 君が命を踏み石に 命永らえ共どもに
 生くべき道を歩みたり
 ひたすら信ずる道を歩みたり
 この道も やがて
 君住む空へ繋がらめ
 減ることのみの多くして
 決して増えることなき
 仲間の集いと知れど
 この庭の梢は
 年経るごとに賑おうらむ
 『花の梢に咲いて会おう』
 いつしか その日を迎ふらむ
 業の道さまざまなれど
 国を想い 人を愛し
 この星を慈しむ者みな
 桜の花となりて咲き競わん
 友よ 魂はともに永遠なり

■ 海の太鼓 ～そして知る人は誰も居ない（ヘルダリーン）

詩 小磯 仁

足をひたすと
 そのまま沈んでいく砂地
 引き上げれば数えきれない
 砂粒がすべり落ち
 小波が最後の粒子を
 洗い落としていく
 水辺道

夏の真昼
 漁師たちのかつぎ上げる
 車輪をはずした山車が刻みつけた
 見えない轍あと
 海の神に近づいた『お浜出』のとき
 太鼓のとどろき

浜辺から家家を越え
 野辺のあたりまで響いた
 撥を握りしめたまま倒れ落ち
 砂を 波を浴びながら消えた
 少年よ
 あなたは出発したままだ

もう永く
 素足で踏み入れたことはない
 いま あなたに
 死に絶えてはいなかった砂の
 一粒一粒が顕われる
 小さな水辺 砂の道
 あの砂浜に山車を乗り入れた
 赤銅色の漁師たちを見ることはない
 撥をあゝ太鼓に打ち込むことはない
 打ち返された振動音が
 鳴り止むことはない

車輪のない山車が
 刻みつけるはずのない
 轍あとがきしませる
 きしみ音が 消え去ることはない
 あの音が
 旅を止めない者に訊ねつづける
 『一度は故郷をもった事実（アリバイ）を
 何故歌わないのか』と

それならば
 おお だから砂粒に全身を浸し
 車輪のない山車に乗り
 海の太鼓を打て
 握りきれない撥を両手に
 あの水鏡を打て

出発者よ
 もういちどだけあの撥を握れ
 幻の
 幻の砂を 幻の轍を
 幻の漁師を 幻の微笑を
 幻の太鼓を
 あなたの太鼓で打ち返せ

もうひとつの水辺道
 もうひとつの砂浜
 もうひとつの海が
 出発者よ
 あなたの波濤を轟かせ
 砕け散ってゆくまで

● 詩人プロフィール

● 堀内 幸枝

1920年山梨県一宮町に生まれる。昭和29年にユリイカより刊行した『紫の時間』他、幾多の詩集を出版。中田喜直の『サルビア』等、広く世に知られるようになった詩をたくさん書き、さまざまな作曲家が好んで曲をつけている。日本歌曲振興会名誉会員。

● 橋爪 文

1931年広島に生れる。14歳のときに原爆被爆。日本ペンクラブ、日本詩人クラブ会員。詩集『昆虫になった少年』『少女14歳の原爆体験記』等多くの著作がある。

● 狩野 敏也

北海道に生まれる。1952年北海道大学法学部卒業。NHKに入社。1964年、山之口獺氏の紹介によって『風』同人となる。現在、日本現代詩人会、日本詩人クラブ等会員。日本歌曲振興会常務理事。第3回埼玉文芸賞、埼玉詩人賞を受賞。『狩野敏也詩集』他、多くの出版作品をもつ。

● 江見 俊太郎

1923年生、2003年没。早稲田大学在学中、学徒出陣し海軍特攻隊員となる。1945年東宝映画入社。1958年テレビ放映開始後、『眠狂四郎無頼控』『新吾十番勝負』他主演多数。後、敵役俳優として新境地を開く。日本俳優連合副理事長として、平成13年成立の文化芸術振興基本法の成立に向けて力を尽くした。

● 小磯 仁

1938年館山市に生まれる。慶応義塾大学大学院修了。ヴェルツブルク大学専任講師、山梨大学教授を経て現在、山梨大学名誉教授。ヘルダリーンの研究家として国際的に知られており、『ヘルダリーン愛の肖像』（岩波書店2004）他、多くの著作、詩作がある。

● 共演者プロフィール

竹澤 嘉明・・・バリトン

東京芸術大学大学院修了。1976年ウィーン留学。ウインナーワールド・オペラ賞2回受賞。サンクトペテルブルグ建都300周年記念メダル授与。東京室内歌劇場運営委員長、二期会会員、日本歌曲振興会名誉会員。福島大学教授。

海鉾 正毅・・・クラリネット

1966年東京芸術大学器楽科卒業。第33回日本音楽コンクール2位受賞。1967年フルブライト留学生としてイーストマン音楽大学、カーティス音楽院に在籍。現在東京クラリネットフィルハーモニー指揮者、群馬大学教授。

千葉 純子・・・ヴァイオリン

桐朋音楽大学卒業後、ジュリアード音楽院に留学。NYアーティスト国際コンペティションに優勝。カーネギーホールでデビュー。バイヤール室内管弦楽団、ドイツ・パッハゾリステン等多くの世界的楽団と共演する。現在、紀尾井シンフォニエッタ東京メンバー。

酒匂 淳・・・ピアノ

武蔵野音楽大学大学院修了。エッセン国立音楽大学卒業。1981年フィナーレ・リグレ国際ピアノコンクール1位入賞。現在山梨大学教授。

横山 佳世子・・・箏

東京芸術大学大学院修了。平成17年度文化庁新進芸術家研修生。故沢井忠夫、野坂恵子氏に師事。現在鳴門教育大学、京都芸術大学講師。

中嶋恒雄・・・作曲

1955 年東京都立日比谷高等学校卒業

1961 年東京芸術大学音楽学部作曲科卒業

1966 年同大学楽理 2 年修後指揮科卒業

1984 年カリフォルニア大学サンディエゴ校研究員

文部省学習指導要領作成委員、教科書検定委員、大学設置審議会委員、学術審議会専門委員、学位授与機構専門委員、日本音楽教育学会副会長、東京文化会館合唱コンクール審査員、上野学園大学、静岡大学、信州大学、琉球大学、宮城教育大学、愛媛大学、宇都宮大学、東京学芸大学、滋賀大学、岡山大学、金沢大学、北海道教育大学講師、1988 年宮城会アメリカ公演指揮者等を務める。第 33 回毎日・NHK 音楽コンクール 2 位、昭和 40 年度合唱コンクール課題曲入選、第 1 回山梨県文化賞奨励賞受賞。平成 6 年「音楽文化振興法」制定に関与する。現在山梨大学名誉教授、財団法人音楽文化創造理事、社団法人日本歌曲振興会常務理事、財団法人音楽教育振興財団評議員、日本現代音楽協会会員、社団法人日本作曲家協議会会員。作曲同人会アルビレオ主宰。池内友次郎、島岡譲、矢代秋雄、松平頼則、中山靖子、山田一雄、斎藤秀雄に師事し、特に佐藤慶次郎に若年より親しく兄事する。電子音楽黎明期の 1979 年に学校器楽のためのシンセサイザー・オーケストラを組織して作品を発表し、注目を浴びた。著書「音楽教育研究のまとめ方」、訳書「ジャズの歴史」他多数の作品、論文がある。平成 6 年初めから、ホームページ「日本音楽家・美術家・詩人 ネット・ギャラリー」を開設している。

http://www.geocities.jp/nakajima_netgall/

中嶋啓子・・・ソプラノ

山梨大学教育学部音楽科卒業。西山恵子、片野坂栄子氏に師事。平成 11 年ミラノ音楽院 (La Scucola Musicale di Milano) に留学し、カルラ・ヴァンニーニ、マルガレータ・グリエルミ女史のもとで発声法を研究する。平成 8 年山梨県民文化ホールにてソロ・リサイタルを開く。また東京でもアルビレオ音楽展など多くの演奏会に、長年にわたって出演する。1996 年以降、中嶋恒雄の歌曲作品を、日本現代音楽協会、日本作曲家協議会の演奏会等において数多く初演し、オペラシティ・リサイタルホール、墨田トリフォニーホール、東京文化会館小ホール、旧東京音楽学校奏楽堂、文京シビックホールなどのホールにて、バリトンの竹澤嘉明、ヴァイオリンの千葉純子、ピアノの酒匂淳、ジェラルド・グローマー、箏の横山佳世子と共演した。2004 年 5 月には、プラハ・スメタナホールと、ウィーン・ヤマハコンサートホールにてチェコのピアニスト、グレスネロヴァー大槻ユリアとジョイント・リサイタルを開催し、好評を博した。社団法人日本歌曲振興会会員。



明晰な日本語の歌を求めて

中嶋恒雄作品の夕べ

中嶋恒雄・啓子

日本歌曲の世界

中嶋 啓子 … ソプラノ
竹澤 嘉明 … バリトン
海鋒 正毅 … クラリネット
千葉 純子 … ヴァイオリン
酒匂 淳 … ピアノ
横山 佳世子 … 箏・25 弦箏

2006

10月20日 金

午後7:00 開演 [午後6:30 開場]

王子ホール

¥5,000 全席自由

【お問い合わせ】

中嶋彬人音楽事務所
TEL03-3451-5487
03-3325-8236

【後援】

(社) 日本歌曲振興会
(社) 日本作曲家協議会
(財) 音楽文化創造
(財) 音楽教育振興財団

中嶋恒雄・・・作曲家

Tsunao NAKAJIMA



1955 年東京都立日比谷高等学校卒業
1961 年東京芸術大学音楽学部作曲科卒業
1966 年同大学楽理 2 年修後指揮科卒業

1984 年カリフォルニア大学サンディエゴ校研究員

文部省学習指導要領作成委員、教科書検定委員、大学設置審議会委員、学術審議会専門委員、学位授与機構専門委員、日本音楽教育学会副会長、東京文化会館合唱コンクール審査員、上野学園大学、静岡大学、信州大学、琉球大学、宮城教育大学、愛媛大学、宇都宮大学、東京学芸大学、滋賀大学、岡山大学、金沢大学、北海道教育大学講師、1988 年宮城会アメリカ公演指揮者等を務める。第 33 回毎日・NHK 音楽コンクール 2 位、昭和 40 年度合唱コンクール課題曲入選、第 1 回山梨県文化賞奨励賞受賞。平成 6 年「音楽文化振興法」制定に関与する。現在山梨大学名誉教授、財団法人音楽文化創造理事、社団法人日本歌曲振興会常務理事、財団法人音楽教育振興財団評議員、日本現代音楽協会会員、社団法人日本作曲家協議会会員。作曲同人会アルビレオ主宰。池内友次郎、島岡譲、矢代秋雄、松平頼則、中山靖子、山田一雄、斎藤秀雄に師事し、特に佐藤慶次郎に若年より親しく兄事する。電子音楽黎明期の 1979 年に学校器楽のためのシンセサイザー・オーケストラを組織して作品を発表し、注目を浴びた。著書「音楽教育研究のまとめ方」、訳書「ジャズの歴史」他多数の作品、論文がある。平成 6 年初めから、ホームページ「日本音楽家・美術家・詩人 ネット・ギャラリー」を開設している。

http://www.geocities.jp/nakajima_netgall/

中嶋啓子・・・ソプラノ

Keiko NAKAJIMA



山梨大学教育学部音楽科卒業。西山恵子、片野坂栄子氏に師事。平成 11 年ミラノ音楽院 (La Scuola Musicale di Milano) に留学し、カルラ・ヴァンニーニ、マルガレータ・グリエルミ女史のもとで発声法を研究する。平成 8 年山梨県民文化ホールにてソロ・リサイタルを開く。また東京でも、ブルースカイ・コンサート、アルビレオ音楽展など多くの演奏会に、長年にわたって出演する。1996 年以降、中嶋恒雄の歌曲作品を、日本現代音楽協会、日本作曲家協議会の演奏会等において数多く初演し、オペラシティ・リサイタルホール、墨田トリフォニーホール、東京文化会館小ホール、旧東京音楽学校奏楽堂、文京シビックホールなどのホールにて、バリトンの竹澤嘉明、ヴァイオリンの千葉純子、ピアノの酒匂淳、ジェラルド・グロマー、箏の横山佳世子と共演した。2004 年 5 月には、プラハ・スメタナホールと、ウィーン・ヤマハコンサートホールにてチェコのピアニスト、グレスネロヴァー大槻ユリアとジョイント・リサイタルを開催し、好評を博した。社団法人日本歌曲振興会会員

プログラム

Program

■ 三好達治の詩による二つの歌曲

一点鐘二点鐘
乳母車

■ 堀内幸枝の詩による四つの歌曲

春の一日
石垣
九月の日差し
また次の恋人に

■ 新波の会歌曲集より

終戦の夜も
鬼のつぶやき

詩：橋爪文

詩：狩野敏也

■ 万葉による挽歌

■ レクイエム — 学徒出陣戦没同期生の霊に捧げる

詩：江見俊太郎

■ 大樹

詩：友永淳子

■ 海の太鼓

詩：小磯仁

王子ホール

Access

- JR 有楽町駅下車
・・・銀座口から徒歩 7 分
- 地下鉄銀座駅下車
・・・A12 出口から徒歩 1 分
- 地下鉄銀座一丁目駅下車
・・・9 出口より徒歩 5 分
- 地下鉄東銀座駅下車
・・・A2 出口から徒歩 2 分

